

「軍都」の歴史

私たちは「反面教師」として生かしているか？



千葉市は「軍都」でした。

軍都であるために、空襲を受けました。

軍都の歴史は、軍隊がガン細胞のように

社会に浸食し、社会を変質させていく歴史でした。

1

原爆・空襲を受けた都市は、ほとんどが「軍都」だった



1945年に空襲を受けた都市・地域のほとんどは、当時軍都（および軍事施設のあった地域）でした。千葉市も、その1つです。

軍隊は、都市＝社会の中に入り込み、社会を変容させました。軍隊と都市住民は「共犯」関係になり、戦争で潤い、戦争を待ち望み、そして戦争末期にアメリカの空襲＝無差別殺戮を受けます。

その代表例が広島市です。

トップダウンで「軍都」にさせられ（軍事植民地化）、ほぼ全ての侵略戦争・植民地征服戦争の出撃拠点となり、朝鮮半島から多くの労働者が強制動員され、そしてアメリカの原爆＝無差別殺戮のターゲットになりました。このような「軍事植民地化」→「加害拠点」→「空襲・原爆被害」の3層をなす経験を、広島以外の多くの「軍都」も体験しました。千葉市も同様の歴史を歩んだと言えます。

さて私たちは、「軍都」の歴史を反面教師として生かしているのでしょうか？

これは「過去の歴史」にすぎないのでしょうか？

軍に「乗っ取られた」街

日清戦争の時に明治天皇が滞在し、大本営が置かれ「臨時首都」となった広島市。その軍都化は、住民が「この街を軍都にしよう」と望んだ結果ではありません。国家の側が一方的に広島市を「軍都にしよう」と決めた結果です。言い換えると、国家が街を「乗っ取った」とも言えます。



広島に到着した明治天皇を描いた錦絵

「戦争で潤う」街、「戦争を待ち望む」街に



広島市の繁華街。軍隊、軍事生産施設の労働者が増えるたびに活況を呈した。

日清戦争勝利後、日本軍は大幅に増強されます。日露戦争では日清戦争の6倍の兵力が投入されました。

広島には特に多くの予算が投入され、インフラが整備され、商工業も拡大します。

その後も戦争をするごとに街は潤い、住民の多くは軍都であることを誇りに感じていきます。そして次の戦争(侵略戦争)を密かに待ち望むような雰囲気も醸成されていきます。

そして、広島市を「成功例」と受け止め、軍を招致する都市が全国に続出します(松下孝昭著『軍都を誘致せよ』などの研究があります)。

「戦勝に浮かれる」街、「侵略を喜ぶ」街に

軍都・広島では、日本軍が出撃するたびに大規模な「出陣式」が開かれ、戦勝するたびに祝勝パレード(提灯行列など)が、兵士が帰還するたびに「凱旋パレード」が行われました。

広島の提灯行列は、その後全国で行なわれた祝勝パレードの「お手本」になったと言われます。



3-1-7 南京陥落を祝う提灯行列。10万人が集まったといわれる。1937年12月12日

広島でも、1937日本軍の南京占領を祝う提灯行列が行なわれた

広島は〈植民地支配〉の出撃拠点になった



広島は、1895年「植民地征服戦争」の出撃拠点でした。左は、その戦争を「顕彰」するために描かれた錦絵です。同年、日本植民地化に反対する清国の残兵や台湾住民は抵抗闘争を組織し、「台湾民主国」宣言を発します。しかし日本陸軍は軍都・広島から出撃して台湾に侵攻、1万人以上の台湾住民を殺害しました（台湾征服戦争）

マレー虐殺を反省しなかった、広島の軍隊OBたち

広島を拠点とした陸軍第5師団・歩兵第11連隊は、1941年（昭和16年）にはマレー半島に侵略し、多くの住民を虐殺します。

戦後、同連隊のOBが、連隊跡地に記念の石碑を建てましたが、そこには「昭和十二年日支事変以降（略）各々勇戦奮闘、克く郷土部隊の名声を高揚した」と刻まれて

いました。自らの侵略・虐殺行為に対する反省・後悔の念は記されていませんでした。

1987年、マレー虐殺の生存者が広島を訪れ、この石碑を見て強く憤るという出来事が起こりました。



戦後は沖縄が「加害拠点」になった

戦後は沖縄が、アメリカ軍によって「加害拠点」の役割を強いられます。



アメリカ軍は、沖縄本島北部にジャングルでの戦闘、砂漠地帯での戦闘を想定した演習拠点を配備しました（当然これらは「アメリカの領土や国民を守る」戦闘訓練ではなく、アメリカ軍が海外で戦争するための訓練です）。

ベトナム戦争時に出撃拠点となった沖縄は、ベトナムの人々から「悪魔の島」と呼ばれたと言われます。嘉手納基地から飛び立ったB52爆撃機は、ベトナムで多くの爆弾を落とし、無差別殺戮を行ないました。言うまでもなく、沖縄の人びとが自ら「無差別殺戮の拠点」になることを選び取ったものではありません。

ベトナム戦争では、沖縄以外にも多くの地域がアメリカ軍の拠点となりました。相模原の「戦車搬出阻止闘争」をはじめ、この加害を少しでも阻止するための抵抗闘争が各地で行われました。

そして現在、与那国・石垣・宮古・奄美などで
配備・建設が進んでいる陸上自衛隊基地。そ
の目的は、「島じまの人びとを守る」ためでも、
「日本を守るため」でもありません。



これらはアメリカの対中国戦略に基づいて（自
衛隊をアメリカ軍の一部のように位置づけて）、中国の「海上封鎖」を可能にするために（つ
まり、中国の貿易活動にダメージを与え、中国経済をマヒさせることができるように）配置
計画されたものです。

南西の島じまは、現在進行形で「軍事植民地化」を強いられているのです。

与那国島



与那国駐屯地●沿岸監視部隊、情報
保全隊配備（2016年）。地对空ミサイ
ル部隊配備計画あり

石垣島

石垣駐屯地●地对艦ミサイル部隊、
地对空ミサイル部隊など配備（2023年）。
拡張計画あり



宮古島

宮古駐屯地●地对艦
ミサイル部隊、地对
空ミサイル部隊など
配備（2019年）

保良訓練場●ミサイル
弾薬庫配備（2019年）



沖縄島



沖縄島●陸/海/空
自、大幅に増強勝連
分屯地に地对艦・地
対空ミサイル連隊司
令部配備計画あり

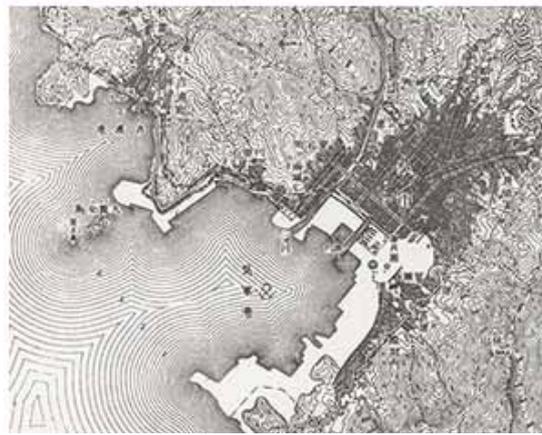
奄美大島



奄美駐屯地●地对空ミサイル連隊
ほか配備

瀬戸内駐屯地●地对艦ミサイル連隊ほか配備

広島県呉(くれ)市=漫画/アニメ映画「この世界の片隅に」の舞台となった街でいま、大規模な「再軍都化」構想が浮上しています。かつての海軍工廠があった地区を、防衛省が「多機能な複合防衛拠点」とする計画です。



戦後は「平和産業都市」をめざしていた

呉は、海軍の拠点、および海軍工廠の二つの軍事施設をもち、世界の二大軍港と呼ばれました。アジア太平洋戦争では、南洋諸島侵略の拠点にもなりました。しかし1944～45年には何度もアメリカの空襲を受け、1945年7月1日の空襲で市街は焼き尽くされました。



その反省から、国会で特別立法である「旧海軍の土地は平和のために使う。軍事使用しない」という法律(旧軍港市転換法、通称「軍転法」)を制定され、呉は平和都市への転換をめざします。

しかし、再び「軍都化」の足音が



しかし1950年の朝鮮戦争を契機に再軍都化が始まり、海上自衛隊が配備され、呉は再び「軍都」化していきます。

そして今年に入り、かつての海軍工廠があった地区(日本製鉄瀬戸内製鉄所呉地区)を、防衛省が買い取り、「多機能な複合防衛拠点」として活用する計画が明らかになりました。

防衛省は「『防衛』目的なのだから、軍転法には抵触しない」という姿勢を採っています。

しかし、日本の武器輸出が解禁されようとしているなか、ここで製造されるのは「防衛目的」の武器だけでしょうか？ そもそも、アメリカと一体となって(アメリカ軍の一部に大きく組み込まれて)進んでいる日本の軍事力増強は、そもそも日本の「防衛」を目的としたものでしょうか？

かつての日本軍が「覇権」のために軍拡を進めたのと同様、アメリカ(+日本)の「覇権」拡大・保持目的であり、それを「防衛」目的と称すること自体が、一種の「詐欺」ではないでしょうか。

「この世界の片隅に」の原作漫画には、軍都・呉の歴史、爆撃機製造の歴史から空襲＝無差別殺戮を受けるまでの歴史を俯瞰する場面があります（このシーンはアニメ映画版ではカットされました）

爆撃機製造の「輝かしい」夢が、「誰かにとっては悪夢」であること、そしてかつて「夢」を見ていた呉市民が、1945年にはアメリカの空襲＝無差別殺戮という「悪夢」を見る側になったことを、冷徹に描き出しています。

この言葉を、現在の私たちも共有すべきではないでしょうか。